

企業人、大原總一郎の愛国心と近代の群像

日本地域文化研究所

客員主任研究員（研究院客員准教授） 兼 田 麗 子

1. はじめに

健全な民主主義のあるべき姿の一要素として、二大政党間での政権交代を企図した小選挙区制度が採り入れられたのが1994年のことであった。それから10年以上、また、米国から民主主義を学び出した第2次世界大戦後から60年以上の歳月を経て、民主主義とは声高に言い難い長期的な一党優位制が覆った。

民がひとたび怒りを爆発させたら誰にも止められない事態へと発展する可能性が大きいこともあり、中国では「政治の核心は何よりも民の生活を安定させ、その心を安んじることにあつた」⁽¹⁾と言われてきたが、日本という国を動かしてきたリーダー達には民を見る目が明らかに欠けていた。国を動かす政治家や官僚達は上から義務などを一方通行的に要求するのではなく、民に思いを馳せる、反対に民は国を思い、協力もする、という双方関係が必須である、ということを自民党から民主党への「歴史的な政権交代」は物語っているといえよう。民は無力のようにありながらも、民の自発的な力は侮れないのである。

国家主導的な愛国心や公共精神、伝統教育の鼓吹が危惧されながらも、2006（平成18）年12月22日には改定教育基本法が公布・施行された。果たして、真に根づいた自発的なボランティア精神や道徳心は如何様に成績評価することができるのだろうか。また、愛国心・公共精神・伝統というのは、国家が法で規定するものなのだろうか、教育現場で評価されるものなのだろうか。

この新しい教育基本法の前文には、「公共の精神を尊び、豊かな人間性と創造性を備えた人間の育成を期するとともに、伝統を継承し、新しい文化の創造を目指す教育を推進する」とある。また第2条の教育の目標の中には「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」と記述されている⁽²⁾。第2次世界大戦前の動きと重ね合わせて、愛国心教育・国家主義的「公」の標榜を反対する声が大きかったことに対して当時の政府与党は、「日本にはやはり祖先の営々として築き上げた法に書かれざる暗黙の申し合わせというか伝統というか社会規範というものがあるのであるから、まず、これをはっきり再認識する教育を取り戻さなくてはいけない」、「公共の精神をたつとび、国家、社会の形成に主体的に参画する日本人の育成、また我が国の伝統と文化を基盤として国際社会を生きる日本人など、21世紀を切り開く、心豊かでたくましい日本人の育成」のためには教育基本法の改定が必要だという見解を示していた。

このままでは国を愛することなどできないと、国のあり方に失望や危機感を抱いた民が自発的に政権交代を選択したこと、また近年、自発的に国を愛する、ということとは趣を異にする改定教育基本法が公布・施行されたことを鑑みると、愛国心の問題を考察することの重要性を痛感する。

愛国心は、国家主義的側面と切り離すことが容易ではない。天皇制を強化する意図で出された教育勅語への最敬礼を拒み、全国的に大きな論争を

呼び起こしたプロテスタント・キリスト者の内村鑑三は、愛国心を持ち合わせていなかったわけではなかった。「第一に人となること、次に愛国者となること、余の外国行の目的であった」⁽³⁾と明かした内村鑑三は、自国の独立、文化と伝統、礼節を尊重するもの、そしてさらには、世界平和や人類愛に開かれたものを真の愛国心と考えた。また、岡山県倉敷を中心にして、民を見据えた上で様々な社会貢献を行った企業人の大原孫三郎は、「余の果たすべき任務に教育事業がある。教育すべきは日本人、いな全人類である。日本を滅ぼすものは露国でも英国でもない。現在の日本の教育方針である。乱世時代の忠君愛国は、大いに改革せねばならぬ」との見解を示していた⁽⁴⁾。孫三郎も内村と同様に、国家主義的な愛国心を廃そうとする意識があったと言えるだろう。

大原總一郎[1909(明治42)～1968(昭和43)]は、倉敷絹織株式会社(のちに倉敷レイヨン株式会社、さらには株式会社クラレへと社名を変更)や倉敷紡績株式会社などの経営に携わった企業人である。總一郎は、父の大原孫三郎と同様に、企業経営者でありながらも多岐にわたる分野でリーダーシップを発揮し、守旧的な考えにとらわれない進歩的なメッセージを発信していった。音楽や文化などの交流を通じて国際親善にも尽力した總一郎は、明治期に誕生した人達にみられがちな「大東亜共栄圏」的アジア主義、一国利益主義的な国家主義に偏していたわけではなかった。總一郎は、第2次世界大戦後の廃墟の中でも、日本独自の技術力にこだわって経済界をリードした一方で、独自に開発したビニロンプラントの中国への輸出を、当時の政財界の反対を押しつけて、強い意志で断行した。紆余曲折を経て体得した技術を、中国の要請をうけたからといって、当時の国際情勢の中で輸出を決断した總一郎に愛国心がなかったわけではない。否、總一郎の発言の中には、日本という国、社会、国民の未来を憂いでいた側面が明確にうかがわれる。しかし、總一郎の愛国心は、いわば、単なる一国の国家主義的なもの、

政治・経済至上主義の枠組みにとらわれるものではなかったように思われる。そこで、本稿は、正義、公正、平等という概念を尊んだオピニオンリーダー、大原總一郎の愛国心を考察する。特にアジアの中では政治・経済・社会的に愛国心が現在も大きな問題であるという問題意識に基づいてのことである。

2. 愛国心とは

2.1. 愛国心とナショナリズム

現今、愛国心について言及される機会は多いが、愛国心は様々な要素から構成されているため、内容が不明確という感否めない。愛国心を文字の通り理解すると、自分の国を愛する心という意味になり、個人が帰属意識を持つ国を形成する要素－例えば風土、景色、習慣、伝統などへの愛着や誇りといった感覚と定義できる。そして、この「国」という場合は、地域や共同体、社会から、そして国というように、同心円状に拡大していくものである。つまり、愛国心は愛郷心をも包摂していると言えよう。いずれにしても、個人に所属や帰属の意識が芽生えていることが前提とされ、本来ならば、この意識は自然発生的なものであると言い切ることもできるはずの類のものである。

それでは、愛国心とナショナリズムはどのように定義づけたら良いのだろうか。テッサ・モリス・スズキ氏は、愛国的な振る舞いとナショナリスト的振る舞いの違いについて検討し、「国旗を振る行為などを愛国心の表れだと説明する場合、私たちは、その自然で感情的な側面を強調している。そのようにして、その行為の政治的影響を無視することは容易である。他方、同じ行為をナショナリズムの表れだと説明する場合には、その政治的・イデオロギー的な側面を強調している」と分析している⁽⁵⁾。そして、自分が愛情を示す場合は自然で健全な祖国愛の表れだと考える傾向があるのに対して、他国人の場合は、同じ行為で

あっても、それを政治的で危険なナショナリズムの表れだと解釈する傾向があるので、「祖国愛とナショナリズムを明確に区別するよりも、それらを、一つのスペクトルの両端と考える方がより現実的であろう。このスペクトルでは、愛情とイデオロギーは常に結びついているが、ときに一方が他方より目につく場合がある」とし、「重要なのは、愛国心とナショナリズムを区別することではなく『どのような愛国心か』を問うことであろう」と結論づけている。ここでは、基本的にこの定義に賛成の立場で考察を進める。ただし、付け加えるならば、ナショナリズムは、愛国心よりも、政治的・イデオロギー的イメージが強くつきまとうものと考えるので、そのような潜在性を最初から含めて議論することを避ける目的で、愛国心という語句をここでは努めて使うことにする。

2. 2. 危惧される愛国心の要素－日本の例

愛国心が、特定の共同体への帰属意識という一般的には自然発生的な情をベースにしていることについてはふれたが、愛国心自体は何ら悪いことでも非難されることでもない。しかし、内在する危険な要素、危惧されなければならない要素が問題とされるのである。愛国心は、個人が帰属する共同体を誇らしく思う心であることから、その共同体のみが優秀であり、評価されるに値する、そして、その反動として、他の共同体は取るに足りぬもの、と偏狭に排除、蔑視する危険性を伴っている。つまり、愛国心は、利己主義、排他主義、自民族中心主義、自国を絶対視する国家主義、国粹主義、ひいては、侵略主義とも簡単に相通じる可能性を孕んでいるのである。

第2次世界大戦前の日本の愛国心は、そのような要素と一体を成していた。明治新政府が、条約改正のために極端な欧化主義政策を選択したため、反動として、国粹主義が台頭するに至った。近代に入り、それまでは存在しなかった国民国家の枠組みと国民を「上」から創出していくために、天皇と愛国心、そして儒教が利用された。自然発

生というよりも、支配者によって意図的に「上」から植え付けられたその愛国心は、国家主義、軍国主義、排外主義、対外膨張主義と表裏一体となったものであり、一連の戦争を裏付けたものであった。そのため、戦後になっても、日本の愛国心は、全体主義的、滅私奉公的な軍国主義や国家主義を想起させるものとして理解されたままである傾向が強い。教育勅語などで愛国心発揚が開始され、民衆は慣らされ、容易に流されていった。始まり、転換点に気づくことなく、流されて、戦争を支持していったのであった⁽⁶⁾。このような経緯が過去に存在するために、愛国心の扱いには注意が必要だと考える人々が日本国内にも存在するのである。

3. 明治・大正期に思想・言論界をリードした人々の愛国心

3. 1. プロテスタント・キリスト者、海老名弾正の愛国心

日清・日露戦争を経て資本主義化を邁進していた近代日本は、農村社会から都市を中心とした労働者社会へと急速に変化していき、横山源之助が『日本之下層社会』に記したような社会の問題が民衆の中に顕在化し出した。そのような中で、多くのプロテスタント・キリスト者達が、問題点や不合理に着目し、改善を訴え、或いは実際に改善のための行動を実践した。プロテスタント・キリスト教が果たした役割は大きい。思想・言論界をもリードした人々が多く存在し、海老名弾正はまさにその代表格であったといえよう。古い固有の伝統と文明とをもった東洋の国にキリスト教が入ってきた場合、往々にしてその国の固有の文化や思想との苦悶や対決を余儀なくされたケースも多い。そこで、ここでは、キリスト教の福音の中心にある他者への愛などを訴えながらも国家権力を受け入れて愛国心を唱えた海老名弾正を例にとって、その愛国心を概観してみることにする。海老名弾正は、大原總一郎より世代が上の人物で

はあるが、教育勅語への最敬礼を拒んだ内村鑑三の愛国心がプロテスタント・キリスト者一般の愛国心ととらえられている状況に数回直面したこと、また、福祉実践者を多く輩出した同志社総長も務めたこと、日本のデモクラシーを考える上で避けて通れない吉野作造や鈴木文治などに本郷教会で影響を及ぼしたことから、現在に至る日本の福祉実践や日本のデモクラシーの根幹に多大なる影響を及ぼしたと考えるため、比較対象とした他の人物たちよりも詳細に海老名弾正の愛国心を考察する。

3.1.1 「戦時」の愛国心—犠牲も厭わないもの

海老名弾正は、明治の王政復古以降に国家的観念が啓発されたことによって、もはや君主家のために尽くす時代ではなく、「主君を補佐して國家の大事を負擔し、其主君をして其無比の大任を完うせしめんと熱中する」時だと説いていた⁽⁷⁾。「愛國の外、別に忠君あるべからず、忠君を外にして別に愛國あるべからず。忠君家は即ち愛國者である、愛國者は即ち忠君家である。忠君と愛國とは之を二個別々の道德として観るべきものではない」と主張した海老名は、忠君と愛國は表裏一体のものになったとして、忠孝主義から進化発展した忠君愛國主義について力説していた⁽⁸⁾。

そして、「一旦緩急あれば義勇公に奉ず、あらゆるものを擲つて國難に殉ぜん」とすることを「實に美はしき國土」だとの見解を示した海老名は、「戦争のある時に、真先に進んで出る、まことにいゝ」ことだとして、生命の犠牲も厭わない行為を愛国心の発露と捉えていた⁽⁹⁾。

3.1.2 「平時」の愛国心—「外国」に並び立つよう、正直に基づいた信頼を勝ち取るように心がけること

海老名は、「戦時」の愛国心に対して「平時」においても愛国心を起こすべきだとの見解を有しており、この類の愛国心と公德教育を結びつけて、「日本人をして活氣あらしむる精神は愛國心

と廉恥心である。之れを土臺にてして日本の公德を養ひ育るならば、必ず功を奏するだらう」と語っていた⁽¹⁰⁾。徳育への傾注を重視していた海老名は、「正直の觀念も熱烈なる愛國心に訴へて吹き込むならば」必ず成功すると考え⁽¹¹⁾、1人1人が日本人全ての代表であるという覚悟の上に、「外国」や「外国人」相手に、努めて正直に振舞うようにすることも愛国心だと主張していた⁽¹²⁾。尚、不正直者1人ために日本国民全体が恥をかくようなことを防止し、日本という国とその体面を守り、「外国」に並び立つように努めていくべきだと海老名が説いたとき、「外国人」と「西洋人」という言葉が併用されている。このことから、海老名が考えていた外国の範囲が自ずと明らかになる。

3.1.3 「平時」の愛国心—日本民族を発展させること

海老名はまた、「世界の人々に敬慕せられ尊重せられ信頼せらるゝ」に至るためには、日本国民が正直さという徳を発揮すると同時に、「高明なる一大理想」を実現するために「満韓」の地へ日本民族は「雄飛」すること、それも愛国心の発露だと考えていた。アングロサクソン系の人々がアメリカやオーストラリア大陸の「新天地」を開拓したように、日本人は「満韓」を文明化するべきだと海老名は主張している⁽¹³⁾。「日本民族は宜しく東西文明の精粹を實現せんと欲して満韓に至るべきであらう」との信念を有した⁽¹⁴⁾海老名には、「忠孝主義既に其目的を達して忠君愛國主義となり、忠君愛國主義既に其目的を達し、更に大轉進化して愛隣化一主義とならざる筈はないのであらう」という考えがあった⁽¹⁵⁾。国を愛するならば、当然に日本民族の発展のために「大轉進化」して、「愛隣化一主義」、即ち満州・朝鮮半島へ向かう行動につながるものであり、日本民族にはそれが可能だと海老名は確信しているのであった⁽¹⁶⁾。海老名は非道な手段を否定し、朝鮮半島を益する方法での定住化、プロテスタント・キリスト教を導入

することを主唱してはいるものの、海老名の愛国心には明らかに進化論とそれに基づく淘汰論、日本一国主義的な特徴が見受けられ、他民族・他国の立場への共感、尊重というものは見受けられない。

3.1.4 住み慣れた土地に固執しないもの

「土人根性」という表現から、海老名が保持した進化論・淘汰論的見解をうかがい知ることができる。海老名は、「土人根性を有する者」と「土人根性を脱したる者」とに二分している⁽¹⁷⁾のだが、「土人根性を脱却した人々」は、有形無形の権威をほしいままにしていると、肯定的な意味合いで薩長土肥出身者を例示している。

一方、「土人根性を有する者」とは、住み慣れた地に固執し、新天地を開拓する気迫も理想もない未発展の人々のことだとされている。海老名は、足尾銅山の周辺住民を例にとって、「哀訴の如き、申分は多々あるべけれども」「土地に戀々たる土人根性の發露ではあるまいか」・・・「北海又は朝鮮に雄飛しないのであろう」と切って捨てており⁽¹⁸⁾、ここにも他者への共感は見受けられない。海老名にとって、住み慣れた地に執着する人々は、進取の気概がなく、文明の敵であり、国を愛する度合いが低いとされていたのであった。

3.2. 実業家、武藤山治の愛国心

武藤山治[1867(慶応3)年-1934(昭和9)年]は、鐘ヶ淵紡績の経営者として日本の近代資本主義を牽引した人物である。武藤は、大原總一郎よりも世代が上の経営者-總一郎の父である大原孫三郎よりも13歳年長-であるが、人道主義的施策を実践しながら企業経営に携わった新しいタイプの代表的な企業家であったことから、簡単に比較の対象とした。

愛国心を自然発生的なもの、そして時代と共に変化するものと捉えていた武藤は、「國自慢は各國民の通有性である。國自慢は愛國心の發露であるから、自分の國を愛するものが自分の國を自慢

するのは當然である」と考えていた⁽¹⁹⁾。この武藤の國を愛する心は、しかしながら、独立自営や自治精神を民に鼓舞しようとする中で、最優先事項の如く扱われていたことは否めないだろう。「國家なるものは國民が支へる可きもので・・・、國民は國家に寄り縋ることが出来るものと誤り解して居るものが多いが、・・・依頼心を起さしむるもので最も大切な獨立自治の精神を傷けるものである。・・・國を愛することが錢を愛することよりも善き事であることを理解せしめねばならぬ。・・・國家への感謝の意を表する・・・。國民は國家を助くるべきものであつて、國家に寄り縋るべきものでないといふ自治精神があるならば、吾國の財政の如き容易に整理せられ得るものである」と武藤は語っていたのであった⁽²⁰⁾。また、運送船常陸丸がロシアの軍艦に撃沈されたことに触れた際には、「・・・教訓は・・・、我軍人諸氏が其本分を守り、一人の敵に降るものなく悠然船と共に沈みたるが如き、其國を愛し名を重んじ、最後の場合に措る覺悟の勇ましき、實に吾等商工業に従事するもの、宜しく學ぶべき所なり」とも説いていた武藤には、武士道的・滅私奉公的な愛国心があったといえよう⁽²¹⁾。

「日本が強くなるには國民全體が堅實でなければならぬ。萬事を日本の為といふ事に目安を定めて進む事が必要である。・・・萬國的に労働者を結合し、内外相呼應して何事も解決せんとする者がある。されど外國の労働者と結びつけて何等利益する處は無いのである。・・・少しでも自國の利を害する如き事があれば、其労働運動には決して乗らない事は明らかである。何となれば外國の労働者は何れも自己の事、自國の事より外には考へて居らぬからである。・・・萬國的に労働者が團結し、進退を一致する事の出来ぬ証據である。自國を愛するのが人情である。故に騙されてはならない。・・・日本が弱くなれば萬國の労働者が日本労働者を助けるであらうか。決して左様な事はなく、却つて侮られ省みる者なきに至るは必定である。この點より考へても自分の國、即ち日本

の國といふ事を目安として考へねばならぬ。・・・我日本人は常に道德を重んじ、愛國の精神を振興せられたいものである」⁽²²⁾ という武藤の愛國心には、この時代の一般的な人々と同様に、一国利益的な愛國心が明らかにみて取れたものであった⁽²³⁾。

3. 3. 松下幸之助の愛國心

大原總一郎は、「経営の神様」と呼ばれた松下幸之助の経営方針の模倣を大々的に自社で呼びかけたことがあった。模倣を必要以上には評価しない姿勢を示していた總一郎にとっては異例とも思われる。しかし、總一郎のこのような行動には何かの理由があるはずである。相通じる何かを感じたのだろうか。そこで、ここでは武藤山治に続いて、経営者、松下幸之助の愛國心も簡単に比較考察してみることにする。

松下幸之助は、日本人としての自覚と誇りということについて再三発言していた。日本人たることの自覚教育が教育の第一歩だと考えていた松下は、日本人としての喜び、自覚、誇りを根づかせるためには、教育現場において「国のことを考え、国家を歌いましょう。国旗を揚げましょう」と教えることが「きわめて必要なこと」だと主張しており、学校で国旗が掲揚されなくなったことが、「日本人たるの自覚を薄めている一つの原因」と推測していた⁽²⁴⁾。

また、国家の行く先を考えた青年が多かった明治時代とは異なり、第2次世界大戦後の昭和期には傍観者が多くをしめるようになった風潮について松下は、精神面を放棄した日本再建策に原因があったと指摘していた。「われわれはなんというても日本人に違いない。日本人である以上は日本の伝統は非常に大事なものである。しかし、その伝統を教えてはならない、いわば歴史を教えてはならないという教育のしかたですね。これは非常に誤っていると思うんです」と発言した⁽²⁵⁾。松下は、国を愛する心のベースには日本の「すばらしい」伝統と歴史の尊重がきちんと横たわっていな

くてはいけなと考えていた。そのため、そのことを教えていくことの重要性を松下は主張したのであったが、この教え方を主張する松下の発言の中には、樂觀的で良い面を見て人を励ましていく、という松下の特徴が現れている⁽²⁶⁾。先祖の中にはたとえば「三人の立派な人がある、二人のちょっと間違った人がある。その三人のいいことした人のことをちっとも頭におかず、ちょっと感心しない二人の人のことだけを考えて『おれの先祖はあかん』と言う」のではなく、「二人のあまりよくない人のことは伏せておいて、三人のいい人のこと」を本人としても語りたいだろうし、実際に語ることが子孫の教育になると松下は言うのであった。「『うちの先祖のだれとだれはこういう社会的な貢献をした人や。おまえも大きくなったらそうやらないかんぞ』と言え、教育になりますわな。・・・これは個人でもそうやと思うし、国またしかりやと思うんです」という松下の考え⁽²⁷⁾は、大原總一郎の父、孫三郎とは対極であるとの感は否めない。孫三郎は、「先祖の自慢をする者は退化している証拠」であり、「子孫の役割は先祖の誤りを正していくこと」と常に論じていた⁽²⁸⁾。

しかしながら、持論とする樂觀主義で、世界では特別な位置づけにある日本古来の伝統と歴史に基づいた日本人を自覚し、優れた国民性を活かしながら文化を培っていく、という愛國心を有していた松下は、海老名弾正のように他者への共感度の低い自民族中心主義に陥っていたわけではなかった。松下は、「なぜ日本がこういうような戦争をし、こういうことをやったかということを考えてみると、道德学者でも何でもないので十分に分からないけれども、当時日本に非常にすぐれた道德というもの、自分を愛するごとく他人を愛する、自国を愛するごとく他国を愛するという高い道德があったならば、あの戦争は起きてないんだ。しかし自分はいかたが他人はあんまりかわいくない、自国は尊いが他国は尊くないというような低い道德があったために、あの戦争が起こっ

たのである。だから道徳というものは、戦争に結びつくもんじゃないんだ、道徳のない姿が戦争をするんだと、こう私は思う」との見解を示していた⁽²⁹⁾。

このように、松下幸之助の愛国心とは、日本国民としての自覚、誇り、日本の伝統と自然を尊重するものであると同時に、他者や他国への共感と尊重も具備したものであったことがわかる。しかしながら、丁稚奉公からの体験と信念に基づいていた経営哲学と同様に、愛国心も、客観的説得力を有していたとは言い難い側面があった。日本の行く先を憂いながらも、長所を探して鼓舞しようとした松下は、日本の長所と確信した信念を「おそらく世界でこんな国はない」⁽³⁰⁾や「必ず日本は“永遠に盛んなる運命をもてる国”である」⁽³¹⁾、「世界じゅうでも日本は非常にすぐれたところ」⁽³²⁾、「日本という国は実に偉い国・・・偉い国というよりも偉い民族だと思う」⁽³³⁾、「日本民族はたいしたものである、こういうことを正しく認識する必要がある」⁽³⁴⁾という文言で自分の見解を語っていたのであったが、松下のこれらの信念を文字通りにとった後進者たちの受け取り方によっては、松下の意図からはずれて、排他性や自民族中心主義に拍車がかかる可能性が危惧される。

4. 大原總一郎の愛国心

4.1. 国への忠誠心とその結果の義務から成るもの

さて、それでは、本題である大原總一郎の愛国心の特徴をこれまで比較対象としてきた人々のものよりも詳細に考察してみることにしよう。

大原總一郎が経営に携わっていた倉敷絹織は、陸海軍から接収と転換の申し入れを受けた。これに対して總一郎は、海軍が希望する航空機製造工場への転換を決定した。同社の工場では、海軍の航空機材の製造が開始された。この「新事業部門発足」に際して總一郎は、次のような訓示を述べ

ている⁽³⁵⁾。「成程今日の名誉ある操業工場を保有する会社は大東亜戦争勝利の暁にはその躍進目覚しきものある事は既に約束されたにも等しいであろう。・・・併し繊維のみを以てしては戦争には勝てない。今はその戦争に勝つ武器が入用なのである。・・・此の戦争に今勝つ武器を生産する事を誰かに一任して自らは戦後の躍進の夢にのみ浸る者ばかりが居たのでは一体誰が戦争に勝つ事その事に肝要なる部門を担当するのであるか。・・・我々は若し自らの力を知るならば、そして戦局の真相を知悉するならば自ら応分の力を振って我々銃後産業の最も苦戦せる第一線へと馳せ参ずる事を誰が止め得るであろうか」と。15年戦争の勃発時、20代の青年であった大原總一郎にも、確かに、戦争を受け入れていた側面が存在したことは否めない。そのため、倉敷紡績と倉敷絹織は、戦後になって制限会社の指定を、倉敷紡績の場合は持株会社の指定も受けた。さらに、軍用機製造会社の社長であった總一郎に関しては、経済人の公職追放、7段階の1番下のG項、つまり「戦争協力者、軍国主義者および極端なる国家主義者」に該当するのではないかと取りざたされるようになった。結局、公職追放は見送られたが、このことに関して總一郎は、国家が誤りを犯し、個人がその国家の要請に従って戦争に協力したのであるから、裁きを甘受する、という姿勢を崩さなかった。『大東亜戦争』は敗戦をもって終結した。私は戦時中の独裁的指導者からは縁の遠い存在ではあったが、戦争が与えた数々の残虐に対して責任を分つ義務からまぬがれようという気持はなかった」というように、總一郎の忠誠心的な愛国心には、義務が伴っていたのであった⁽³⁶⁾。中国へのビニロンプラントを決断した際の心内を語った「戦争によって物心両面に荒廃と悲惨をもたらした過去の日本人のために、何程かの償いにでもなればということ以外にはない」という言葉の中にも、国を思う心とそれに伴う義務が現われている。

4.2. 自然を愛し、尊重するもの

總一郎の愛国心の中には、その他の明治生まれの人物と同様に忠誠心的なものが内在していたことは上述したが、そうではあっても、盲目的な忠誠心、愛国心ではなかった。国を愛するが故に、常に批判的精神で国の未来を守っていく努力にも傾注していたと言える。終戦直後の秋から總一郎は、倉敷絹織の課長クラスの若手が参加する研究会を開始した⁽³⁷⁾。「会社をいかに再建するかということよりも、もっと広範囲なテーマが取り上げられた。祖国再建のための哲学を一緒に考えていこう」とする試みのものであった。「第一次世界大戦におけるドイツの戦後処理」というようなテーマが各人に与えられ、発表とそれを受けての討論が行われた。

總一郎は、日本の将来のために、自然環境重視の視点で警鐘を鳴らし、意識転換を呼びかけ続けた。「経済が楽になって収入がふえ、国民生活が物質的に楽になったとき、日本の国土にはいったい何を見出すでしょうか。そこには、ただ荒廃した精神的な砂漠だけが残って、貨幣が氾濫し、あるいは消費財や耐久消費財の山がそこにあるだけかもしれません」⁽³⁸⁾と語った總一郎は、自然をベースにして愛国心を説いた。国を愛する心は、自然を愛する心、という總一郎の愛国心は、現代のように、地球温暖化が進み、環境保護が声高に叫ばれている時勢では、普通のことと捉えることができるかもしれない。しかし、今から40年以上も前に大原總一郎は、この視点を愛国心の中心をなすものと訴えていたのであった。「自然はもっと神聖なものであって、人間の本当の魂の故郷は自然の中に見出されなければならないし、また、民族の伝統も、自然を離れては存在しないと思う」⁽³⁹⁾。「日本人が愛国という時に、真に国を愛しているのか、単に反米、反共だけで何の拠り所もないのか種々である。歴史を基礎にしての愛国心もあるが、当然目標と理想があるべきで、それに向かつての努力がなされなければまともな愛国心とはいえないと思う。諸外国の例をみて

も、自国の自然を尊ばない文明国は少ないように思われる」⁽⁴⁰⁾との考えを示した總一郎は、日本人が自然を荒らしながら盆栽を作って楽しむ風に警鐘をならした。「真の自然を愛せず模型だけ好むということは、古い文明の象徴であるといえるかもしれないが、真に国を愛しているのか疑問である」と苦言を呈した總一郎は、自然環境破壊の否定を愛国心の目標、そして、理想として見定めてメッセージを発信していたのであった。

4.3. 文化・伝統を重んじるもの

芸術や音楽などを愛した大原總一郎のお気に入り一つの都市はウィーンであった。總一郎は、「伝統を重んじる精神」がウィーンの人々の中に生きていると感じ、親近感を持っていたと思われるのだが、「一国の姿が造り上げられるときに最も大切なものは、世界史的光輝をもつ自国の伝統思想が現代に生きているということだと思う」⁽⁴¹⁾との見解を示した總一郎にとって、文化や伝統を軽んじる姿勢は愛国とは考えられなかった。木曾馬籠の藤村記念館を訪問した際に「藤村記念堂には毎日何十人かの訪問客がある。そして、ここを訪れて帰る人は何程か日本の歴史の真実にふれ、日本の精神の純粹さにふれ、日本の自然の詩にふれて、人生の希望を再発見する気持ちが湧きおこるのを感じるであろう。馬籠の自然は美しいが特に比肩するものがない絶景に恵まれているというのではない。ただそこには多くの価値あるもの、善意の結集が生み出した一種特有の世界があることを、否定することはできないであろう」⁽⁴²⁾との感想を漏らしていた總一郎にとっての愛国心は、積み上げてきた価値あるもの、伝統も、自然と同様に尊重すべき要素としていたのであったのである。

4.4. 愛郷心を基盤に持つもの

愛国心は、自然や文化・伝統を愛するものでなくてはならない、と考えた總一郎は、郷土愛を基盤に持つことが愛国心の絶対条件と主張してい

た⁽⁴³⁾。郷土は国の内部にあるもの、その歴史もまた国の歴史の一部であり、内部にあるものであるから、「郷土を愛せずして国土を愛するということは考えられず、郷土の土を愛せずして全国土を愛することは考えようがない」との見解を總一郎は示していた。そして、愛国心の有無を問いたければ、郷土を愛する心を問いかけてみよ、自ずと答えは出てくるというのであった。「郷土の自然を愛しているか、郷土の隣人を愛しているか、郷土の歴史を愛しているか。次にその愛し方が正しい愛し方であるか。最後にそれが事実としてその通りに実行されているかどうか」、ということを考えることによって愛国心を有しているか否かを証明することができると總一郎は説いた。郷土を愛していなければ愛国心と叫んでも真実味がなく、また、郷土愛を称えても事実や行動によって示さない人が愛国心を称えても、「空疎で危険な響きをしか与えることができない」と總一郎は警鐘を鳴らしていた。總一郎の考える愛国心－愛郷心を基盤に持つもの－は、過去の日本が有していた危険性とは無縁のものであることを總一郎は声高に叫びたかったように思われる。「正しい郷土愛に基礎を持つ愛国心は侵略の意図を持たない」と。この特徴からは、さらに次項の「人類としての視点にたった共感や人間の尊厳重視に開かれたもの」という特徴を引き出すことができるのである。両者は連携しているものなのであった。

4. 5. 人類としての視点にたった共感や人間の尊厳重視に開かれたもの

倉敷絹織の工場が、海軍の航空機製造工場に転換したことは既述したが、このとき、沖縄から来た女子挺身隊について總一郎は次のような思いを吐露していた。「沖縄挺身隊の百二十人はやるせない郷愁とたたかいながら、工場では六千人の中の模範的な存在となった。彼女達は『沖縄』と一声聞いただけで、とめどなく涙が流れるほどの気持を胸に畳んで励まし合いながら、毎日寄宿舍と職場の間を往復した」⁽⁴⁴⁾ という總一郎の記述から

は、自分の愛郷心－そして同心円状にある愛国心－と同様に他人のものにも共感・理解する姿勢がうかがえる。「出身地や出身国、及び属性によって、人を見る目を変えるという概念を持ち合わせていなかった人物」という近しい人の証言もあるが、總一郎は、人の属性にとらわれず、利己主義に陥らず、人間の尊厳を忘れないように心掛けた人物であったと言えよう。「私は人間の尊厳は思想以前のものであり、思想以上のものであり、……。人間の尊厳は思想の尊卑や思想の内容如何によって上下したり、変動したりするものではなりません。それは思想以前の時代からすでに厳として存在していた疑うべからざる実在であります」と總一郎は主張していた。また、「歴史は未だ戦争の悲劇を完全に清算しきってはいない。……。戦争を起すのは武器ではなくて人間であることを、否むことは出来ない。……。他国を信じないこと、他国を憎むことでは戦前と少しも変わることなく、また敵の設定と敵への非難の中にのみ正義の拠り所を求めることも、また変わることのない事実であるとすれば、歴史は進歩するのか回帰するのか、その判断に迷わざるを得ない」⁽⁴⁵⁾ と憂慮した總一郎の文言には、利己主義、排他主義、自民族中心主義への疑問が明らかに呈されている。

5. おわりに

1999年以降の周辺事態法、国旗・国歌法、通信傍受法、有事法、改定教育基本法の成立以降、第2次世界大戦以前への回帰を憂慮する声が、特に中高年齢者を中心に高まってきた。民が経済的・物質的関心事ばかりに気をとられているうちに、いつの間にか、取り返しのつかない道を歩んでしまっているのではないか、ということが危惧される。時代の推移と環境の変化が人の志向を変えさせることもあるということを前述したプロテスタント・キリスト者、海老名弾正の発言の中に認めることができた。ある点を緊急課題ととらえ、問

題解決を図る場合、その主観的意図に基づいて改善を追求するばかりに、国家の意図などに－それが深刻な問題点を含んでいるにもかかわらず－いつも簡単に流されてしまう場合がある。政治に失望し、不信を抱いた民は、満州事変後には軍部やメディアに追隨して流されてしまった。

「公共の精神を尊ぶ」、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養う」、日本の伝統や社会規範を「はっきり再認識する教育を取り戻す」ために教育基本法の改定が必要だとされた。趣旨を読む限り、どれも、もっともだという感じがしてくる⁽⁴⁶⁾。この法律に基づいて、愛国心・公共精神・伝統を「上」から植え付ける教育を行い、ゆくゆくは評価の対象としていく可能性も出てきた。評価されるものとする、その愛国心は、「上」の人々の意思に一致したものでなくてはならないだろう。そうすると、日本の戦前のように我々は容易くコントロール・扇動されてしまう可能性が出現する。

米国のいわゆる9・11事件の際には、支配者が「上」から善と悪という単純な二元論で人々の愛国心を煽った。ショッキングな視覚も一役買って、多くの人々が、排他的、報復的といった危険な要素を含んだ愛国心思想にとらわれた。そのような雰囲気の中で、愛国心の見直しを提言した場合、「アメリカ人ではない」、あるいは「アメリカから出て行け」という、日本の戦前にも存在した「非国民」的扱いを受けかねないくらいが存在した。

「戦後レジームからの脱却」、そして「美しい国」をうたって登場した元首相の下でたまたかわれた2007年の参議院選挙でも自民党は「歴史的な大敗」を帰した。年金問題や政治をめぐる資金も大きな争点となったことは否めないが、強行採決の連続に民がノーを突きつけたという見方も存在していた。そして、民が国を盲目的に愛する余裕がもはやなくなった2009年の衆議院選挙においては

自民党から民主党への「歴史的な政権交代」が起こった。今、我々、民がその存在と意思を問われているのである。日本は盲目的な愛国心とそれがもたらした結果を学んでいるはずである。戦争当時の市民は発言や思想の自由を持たなかった。しかし、現在は、「上」の力やマスコミに強制・コントロールされずに、我々がいかに自発的に判断・選択をするかが、試されているときだと考える。もはや国という単位のみで思考するときではない。

このような今、有益なものの見方の一つが大原総一郎の愛国心であると考ええる。総一郎の愛国心は、忠臣愛国の特徴を有していたものとは異なり、忠誠心のみならず、その結果に対する義務も備えていた。そして、文化や伝統のみならず、自然をも尊重することの重要性を明確に打ち出したものであった。現代世界の最も大きな関心・課題は、世界平和と環境問題という見方もできる。生命軽視の社会問題も多発している昨今、総一郎が訴えた生命の源である自然環境重視の視点は不可欠である。また、苦勞して自社開発したビニロンのプラントを国交樹立前の中国へ乞われて輸出した総一郎の愛国心は、人類としての視点にたった共感や人間の尊厳重視に開かれ、排他性や利己主義、自民族中心主義とは無縁のものであった。先入観や偏見、固定観念などを廃し、無国籍な視点から国と地域、共同体の未来を考えた総一郎の愛国心は、繰り返しになるが、自国のみのことを考える類のものではなかった。

様々な国の出身者から構成される米国では、学校で教えられる歴史は、米国サイドから考察した歴史であり、そのことに対する了承・署名が生徒の両親から獲得されるという。ある国では愛国心は問題視されないが、日本の場合の愛国心は許されない、という議論は聊か説得力がないと考える。日本に住む民も、共同体や国、自然、伝統、文化などに愛着を抱くことは当然であろう。ただし、万世一系の単一民族を主張する愛国心というものは通用しないと考える。つまり、愛国心の内

容次第なのである。「愛国心という言葉は、戦後だれいうとなく、一種の禁句のようになっている時代があった。・・・しかし、いつのころからか再び愛国心が論ぜられるようになった。それはまず、左翼と右翼の双方から公然と主張されるようになった。それらは、もちろん、内容を異にしているが、国民の中に愛国心の火が消え去っていないということが、主張者のアピールのよりどころであったに違いない。けれども、本当に愛国心をもっていなければならぬはずの広範な大衆からは、愛国心の影は薄れていった。占領軍に接する機会を発端として、日本人は精神的国籍を失うことを奨励されたかのように、日本人古来のものを外国に売り渡し、世界のものを自分のもののよう吸収した・・・もっと大切なことは、なぜ国際主義がやすやすと排外主義と結びつき、愛国心が単純に排外主義に結びつくかという点についての、日本人自身の伝統的弱点に対する究明でなければならないと思う」⁽⁴⁷⁾ という大原總一郎の提言どおり、議論が必須である。盲目的愛国心で、愛国心の危惧される要素を過去に振りかざした日本には議論をする必要、そして義務があると考ええる。その場合、未来を切り開いていかなければならない我々が大原總一郎の愛国心から改めて学び、考えることは多いはずである。

(注)

- (1) 溝口雄三・丸山松幸・池田知久編『中国思想文化事典』東京大学出版会、2001年、221頁。
- (2) 改定教育基本法の詳細については、文部科学省のウェブページを参照。
- (3) 内村鑑三『余は如何にして基督信徒となりし乎』岩波文庫、1958年、106頁。
- (4) 犬飼亀三郎、『大原孫三郎父子と原澄治』倉敷新聞社、1973年、24頁。
- (5) テッサ・モーリス・スズキ、「愛国心を考える」『岩波ブックレットNo.708 愛国心を考える』伊藤茂訳、岩波書店、2007年、23-7頁を参照。
- (6) 100年後の人々を対象にして、敗戦の原因などを戦後

に書き綴った日記の中で徳富蘇峰は、「日本が、大東亜戦争を、起したとはいわぬが、余儀なく起つに至った所以のものは、決して一人一個の考えではない。いわば国民的運動であり、国家の大勢である。ほとんど自然の力であるといっても宜い。風の吹く如く、水の流るる如く、潮の差す如く、石の転じる如く、勢い然らざるを得ずして然るものである。・・・大東亜戦争は、決して軍閥が製造したものでもなければ、作為したものでもない。恰も田舎の水車が、少しずつ水が溜って、その溜ったる力で回転する如きものである。その力というは、即ち国民的運動力である。国民の志望というてもよく、国民の欲求というてもよい。あるいは国民の本能というても差支ない。若し罰せんとすれば、国民の本能その物を、罰するより外に仕方はあるまいと思う」と記述している（徳富蘇峰、『徳富蘇峰 終戦後日記－「頑蘇夢物語」』講談社、2006年、133-4頁）。

蘇峰の国民が一致して戦争を支持していったという見解に対して、井上太郎氏は、国民は面従腹背であったと指摘している（井上太郎、『大原總一郎－へこたれない理想主義者』中央公論新社、1998年、119頁）。

- (7) 海老名弾正『人間の価値』、廣文堂書店、1922年、586頁。尚、海老名の愛国観については「我が常に高調する世界観、人生観、國家観國家は悉くこの著書中に發表してある」と海老名自身が記していた本著書を主として参照した。
- (8) 同上。
- (9) 同上、514頁。

ちなみに、教育勅語への最敬礼を拒んで不敬に問われ、教壇を去ったことでも有名な内村鑑三は、米国留学を終えて帰国した直後に愛国的なキリスト教ということを主張し出した。日本人に適切な日本的な伝道を行おうと考えたのであった。海老名にとっての「神の国」は、膨張によって日本の領土を拡大し、国の文化や経済を発展させることによって実現できると考えられていた側面が大きい。内村にとっての「神の国」とは人間の努力によって地上に建設できるものではなく、キリストの再臨によって実現されるものであった。海老名が犠牲も厭わないこと、そして戦死を愛国の士だと主張したことに対し、内村は、「余は日露非開戦論者である許りでない、戦争絶対的廃止論者である、戦争は人を殺すことである、爾うして人を殺すことは大罪である、爾うして大罪を犯して個人も国家も永久に利益を収め得やう筈はない」と説いていた（内村鑑三、「戦争廃止論」『内村鑑三全集』第11巻、1981年、296頁）。

- (10) 海老名弾正『人間の価値』554頁。
- (11) 同上、545頁。
- (12) 同上、542-4頁。
- (13) 同上、564-8頁。

- (14) 同上、566頁。
- (15) 同上、593－4頁。
- (16) 海老名によると、日露戦争を境にして日本は、防衛策に終始した消極的態度から積極的・進撃的態度に変換したというのであった。その理由として海老名は「日本は百年の久しき恐怖し來りたる世界の最大強國と戦うて、大勝利を奏した」ことを掲げており、進撃的態度とは「朝鮮は如何にすべき、滿洲は如何にすべきといふこと」が進撃的態度だと説明した海老名は「朝鮮問題を解すると否らざるとは、日本が大帝國となりて其使命を果し得るや否やを證するものである。朝鮮問題は即ち日本民族の試金石である」との見解を示していた（同上、589－90頁）。朝鮮について海老名は次のようなことも語っていた。「朝鮮の事情を思ふに、朝鮮は事實に於て日本に合併すべき國柄である。之を離隔せしむると合併せしむるとは我れの態度如何に存する」と（同上、588頁）。
- このような海老名について、金文吉氏は次のように指摘している。「朝鮮伝道、日韓併合に対する日本人キリスト者の態度は様々であったが、その中で組合教会、特に海老名の立場は独特であった。海老名は朝鮮伝道を積極的に支持し、日韓併合を政治的かつ宗教的に肯定した。・・・海老名にとって、宗教的事柄（伝道）と政治的事柄（日韓併合）が一つのものと考えられている。・・・海老名における伝道と日韓併合の同一視は、朝鮮における反日感情をキリスト教によって懐柔することが目的であり、この点で海老名の『神道的』キリスト教は天皇制国家、日本帝国主義のイデオロギーとしての役割を担っている」と（金文吉、『近代日本キリスト教と朝鮮－海老名弾正の思想と行動』明石書店、1998年、165頁）。
- (17) 海老名の「土人根性」に関する見解については、海老名弾正『人間の價值』557－68頁を参照。
- (18) 同上、558頁。
- (19) 武藤山治、『國自慢』『武藤山治全集』第6巻、1965年、223頁。武藤は、「愛國の心は時代を超越して常に吾國民の心に宿る貴重なものであるが、其外に現はるゝ形は時代に依つて異ならねばならぬものである。何となれば愛國心の對象となる事物は時の推移と共に變化して行くからである」と指摘していた（同上、330頁）。
- (20) 同上、第3巻、1963年、21－2頁。
- (21) 同上、第2巻、1964年、34－5頁。滅私奉公的な国への愛を武藤は会社に対しても要求していた。「戦争は・・・成敗の岐るゝ所に兵士の忠實なる精神にあるが如きは、・・・會社に對する心得とするに足るを覺ゆ。・・・職工の愛會社心を發せしむるに務めざる可からず。・・・我忠勇なる兵士が國に盡すが如くならしめんことはなり」と（同上、33－4頁）。
- (22) 同上、428－9頁。一方では、他国との関係については、「一國民にして博愛の精神が強ければ、そこに階

級の争も薄らぎ、更に一國民相互に愛し合ふのみならず、その博愛の精神を他國民にまで及ぼせば、他國民の尊敬するところとなつて、國と國との間の争をも避くる事が出来る」という見解を有していたものの、武藤の愛國心はやはり、個人が国に尽くす類のものであったと言えそうである（同上、第3巻、26頁）。

- (23) しかし、武藤は、一国利益主義的な愛國心ばかりを吹聴した人物ではなかった。朝鮮や台湾を植民地化することの是非などについては武藤も大部分の同時代人と同様、改めて問うてはいなかったが、朝鮮や台湾の人々－他者－への共感の必要性を説いていた。この点については、拙稿「『脱亜論』と東アジア共同体－ユートピアなのか？」『國際アジア共同体ジャーナル』創刊号、國際アジア共同体学会、2008年、173－190頁を参照。
- (24) 『松下幸之助発言集』第5巻、PHP研究所、1991年、103－5頁。
- (25) 同上、第4巻、34頁。
- (26) 松下幸之助については、「人の使い方というか、人にやる気を出させるのが実にうまい」ことや「一言でいって、部下の短所を見ない・・・とかく欠点ばかり見がちのものですが、その人のいいところだけを見る。これには関心しました」ということが周辺の人から指摘されている（『小島直記伝記文学全集』第11巻、中央公論社、1987年、19－20頁）。
- (27) 『松下幸之助発言集』第4巻、34－5頁。
- (28) 『大原總一郎随想全集』1巻、福武書店、1981年、64頁。
- (29) 『松下幸之助発言集』第9巻、125頁。
- (30) 同上、第5巻、145頁。
- (31) 同上。
- (32) 同上、第15巻、102頁。
- (33) 同上、第11巻、359頁。
- (34) 同上、360頁。
- (35) 『大原總一郎年譜＜資料編＞』クラレ、1980年、35頁。
- (36) 同上、103－4頁。
- (37) この研究会についての詳細は、井上太郎『大原總一郎－へこたれない理想主義者』136－7頁を参照。
- (38) 『大原總一郎随想全集』4巻、299頁。
- (39) 同上、298頁。尚、總一郎は、日本が、自然破壊から方向を転じて自然の緑多い国へと変わっていった未来を想像するエッセイを、「私の夢」と題して綴っていた（同上、2巻、162－3頁）。
- (40) 模型だけ好むことへの苦言の文言も含めて、同上、4巻、315頁を参照。
- (41) 『大原總一郎年譜＜資料編＞』、44頁。
- (42) 『大原總一郎随想全集』2巻、254－5頁。
- (43) この項目の總一郎の見解については、全て大原總一郎、「愛國心と愛郷心」『高梁川』12号、高梁川流域連盟、1961年、4－5頁を参照。
- (44) 『大原總一郎随想全集』2巻、257頁。

- (45) 同上、294－5頁。
- (46) このもっともらしいということに関して次のことを記しておく。「皆が正しい言うこと、皆がそうだと言うことには、必ずうさん臭いところがあると思うべきだ。その両者の総合判断、そこからあるべき進路が見出せる」ということを、17歳で敗戦を迎えた西原春夫氏は、価値の大転換の経験に基づいて、後世に言いの残さなければならないと記している（西原春夫、『日本の進路 アジアの将来－「未来からのシナリオ」』講談社、2006年、277－83頁）。
- (47) 『大原總一郎随想全集』 4巻、249－50頁。また、「何がしかの理想をもつということが、ナショナリズムとは不可分の関係にあると私は思うのです。その理想の

質によって、前向きにも後向きにもなります」と語った總一郎は、国民生活のあり方について、国土と国民にとっての真の幸福について経営者が改めて考えること、自らがイメージを描く経営者であることを1963年の段階で要求していた。總一郎は、民族主義的特徴を有するナショナリズム、個人が国や民族のために尽くし、そのことによって、自分が高められたような気持ちになる類の「富国強兵」の「強兵」に結びつくナショナリズムを「多分に外から強制され、作り上げられた性格」を有する「後向き」、「前時代的」ナショナリズムと呼んでいた（＜対談＞大原總一郎・青山秀夫、「前向きのナショナリズムへ」『別冊中央公論・経営問題』第2巻第4号冬季号、中央公論社、1963年、49－56頁）。